



# 地域歴史遺産を保全・活用できる担い手の育成<報告1-2> (第4章 第2回国公立大学フォーラム : 「地域歴史文化の保全・継承と広域災害に備えた大学間ネットワークの形成のために」)

村井, 良介

---

**(Citation)**

地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした地域歴史文化育成支援拠点の整備, 特別研究プロジェクト(平成24年度最終事業報告書):28-29

**(Issue Date)**

2013-03-31

**(Resource Type)**

research report

**(Version)**

Version of Record

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005289>



## 報告①-2

### 地域歴史遺産を保全・活用できる担い手の育成

村井 良介  
(神戸大学)

神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターでは、2010～2012年度の3年間、特別研究プロジェクト事業「地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした地域歴史文化育成支援拠点の整備」の柱の一つとして、地域歴史遺産を保全・活用できる担い手の育成に取り組んできた。

ここでは、そのなかでおこなってきた、市民向けの「まちづくり地域歴史遺産活用講座」(以下、活用講座)を中心に、取り組みの概要と意味づけについて述べる。

#### (1) まちづくり地域歴史遺産活用講座

特別研究事業の3年間で計8回、兵庫県の県民局単位(7県民局=中播磨・但馬・阪神南・阪神北・神戸2回・北播磨・丹波)で、活用講座の試行プログラムを実施し、プログラムの開発を進めてきた。いずれも兵庫県教育委員会との共催で、地元自治体の後援を得ておこなった。

講座の内容は、まちづくりのノウハウや、当該地域の歴史についての知識を教えるものではなく、考え方や見方、学び方などに重点をおいたものである。

当初は、地元自治体の関係者などを通じて受講者を募ったが、第5回目からは公募をおこなった。いずれも講座終了後の意見交換会とアンケートで受講者から意見を聞き、内容の改善に努めた。

受講後のアンケートと意見交換会から、いくつかの課題が見えてきた。しばしば聞かれたのが、何か活動したいが、どうしたらいいかわからないという意見である。

こうした意見は、詳しくみれば、どのような活動をすればいいかイメージがつかめないというケースと、地域社会の中で、たとえば自治会でどうやって自分の意見を言っていけばいいとか、新住民はいつまでたっても「よそ者」扱いで溶け込んでいけないといったケースの二つのタイプがあり、前者については、各地の地域歴史文化を生かしたまちづくりの事例紹介を講座の中に取り入れることで、かなり解消された。一方、後者については、講座の充実によって解決できる問題ではなく、地域歴史文化に関わる活動についての社会の理解を高めていくという、環境整備の問題である。したがって、一朝一夕になるものではないが、講座を通じて少しずつでも理解を持つ層を広げていくとともに、講座以外の日常的な地域連携活動の中でも、あるいはその中でこそ取り組まれるべき課題である。

一方、意見交換会には意外な効用もあった。受講者同士が、まちづくりや地域歴史文化の保存・活用のあり方について意見を戦わせる場面があり、また同席していた開催地の自治体の文化財担当者が、住民の声を聞く機会ともなり、意図せずして、市民・行政・研究者が意見を交わす場となったことである。ここからみえてきたのは、「講師が受講者に教える」という一方通行ではなく、それぞれの意見を交流させるコミュニケーションの重要

性である。

つまり、地域歴史遺産を保全・活用できる担い手の育成は、講座だけで完結しているわけではないということである。

## (2) 担い手育成の意味と意義

以上の点を踏まえて、担い手育成の意味と意義について考えてみたい。

まず、その前提として地域歴史遺産の性質を考えておく必要がある。地域歴史遺産は所与として「ある」ものではなく、人々が、それを地域にとって大切なものと認識し、保存し、伝えようとする営為が介在することで、地域歴史遺産に「なる」ものである（奥村弘『大震災と歴史資料保存』、吉川弘文館、2012年）。すなわち、人によって（文脈によって）何が大切かは異なるということであり、地域歴史遺産はその文脈によって多様であるということである。したがって、こうした地域歴史遺産を豊かに残していくためには、担い手も多様でなければならず、したがってこうした担い手が社会に幅広く存在することが必要となる。

一方、特別研究事業の人材育成で想定された「担い手」像として、一つは、地域で活動を主導する地域リーダーである。しかし、こうした存在は重要であるが、意図して創り出せるものではない面がある。これに対し、主体的な活動の推進役ではないが、活動に参加する人や、自身は関心がなくても、地域歴史文化や、それを活かした活動の重要性を認めている人がある。先の担い手の多様性の確保という点からすれば、講座を通じて、後者のような層を増やすことができれば、それだけでも成果であるというよう。

また、文脈の多様性という点からは、そうした文脈間での双方向的なコミュニケーションも重要である。近年、科学コミュニケーション論の分野では、一般の人々には知識が欠如しており、専門家が正しい知識を教えることで、科学に対する理解が向上するという「欠如モデル」から、人々の科学に対する知識は、それぞれの置かれている文脈に沿って存在するという「文脈モデル」への転換が起こっている（藤垣裕子・廣野喜幸編『科学コミュニケーション論』、東京大学出版会、2008年）。すなわち、専門家が一般の人々に知識を与えるという一方的なものではなく、文脈間の双方向的なコミュニケーションが必要である。ここで重要なのは、他の文脈への想像力、つまりは自分にとっては意味のないものでも、他者にとっては重要なものかもしれないという想像力である。ここにおける専門家の役割の一つは、地域の生活者が持つ文脈の外部から、別の文脈を持ち込み、相互にコミュニケーションし、あるいは想像力を強化することである。

すなわち、地域歴史遺産を豊かに継承していくためには、専門家の一方的な啓蒙活動ではなく、こうした双方向的なコミュニケーションが重要であり、そうした環境・土壌をつくり出していく必要がある。活用講座は、それで完結するものではなく、こうした環境整備の一環として位置づけられる。